

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 英語教授学領域
氏名 ハーン アーロン

【論文題目】 A Critical Discourse Analysis of a “My Share” English Lesson Plan Corpus: Exploring Beliefs, Identity, and Power
(「マイシェア」英語レスンプラン・コーパスの批判的談話分析：信念、アイデンティティ、力の探索的研究)

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、学会誌に掲載された英語レスンプラン(My Share)の談話をコーパス化し、多元的な理論的アプローチであるCDA(Critical Discourse Analysis: 批判的談話分析)により、その談話が、教師・学生の信念・アイデンティティ、教師と学生間の力関係をどのように表象しているのか、また、日本のより広範な教育的コンテキストとどのように関わっているかを明らかにすることが主な研究目的である。

第1章(序章)では、談話、談話共同体、ジャンル、アイデンティティ、CDA、コーパス言語学等の本論文の基盤となる概念・アプローチと本論文の研究目的・概要・構成について述べている。第2章(歴史的背景)では、日本の英語教育制度・政策に関する歴史的変遷とともに、国際化・規制緩和・アクティブラーニング等の最近の教育政策・改革の状況も踏まえて記述しており、第10章の背景となる章として位置付けられる。第3章(先行研究)では、CDAの原則とともに、教育政策分析、教室談話分析、教科書・シラバス・レスンプラン分析等の教育分野でのCDAに基づく研究、教師のアイデンティティ・信念、コーパス分析等の先行研究を包括的に踏まえた上で、レスンプランに表象された教師の信念・アイデンティティ等を、CDAのアプローチにより分析した研究は見られないとしている。

第4章(研究方法)では、My Shareを研究対象とした理由、本論文に関わるCDAの原則(社会的実践への関わり、方法論的多様性、ミクロ・マクロ分析、非言語的データの分析、自己再帰性)とともに、コーパス分析、ジャンル分析、談話・テキスト分析を含む分析の観点を示し、ジャンル分析にはBhatia(2012, 2015)のCGA(Critical Genre Analysis: 批判的ジャンル分析)を部分的に取り入れたとしている。CGAの枠組により、My Shareを専門職ジャンル(professional genre)に位置付けた上で分析できたといえる。また、リサーチデザインとともに、4つのRQ(リサーチクエスション)を提示している(RQ1: My Shareのジャンルのルールはどのようなものなのか。RQ2: どのような教師と学生の信念とアイデンティティがMy Shareに表象されているのか。RQ3: My Shareでは力(特に教師と学生間)はどのように働いているのか。RQ4: My Shareは、日本の言語教育・学習の背後にある教育政策等のコンテキストとどのように関わっているのか)。さらに、上記の分析の観点と第5章—11章の分析方法との関係についても詳細に記述している。

第5章(構造分析)では、セクション分析、非言語的要素の視覚分析等により、セクションの構成・内容と過去のMy Shareからの変化(ルール化の進展)を詳細に分析し、第6章(ムーブ分析)では、当該ジャンルの目的・機能により、テキストをその構成要素であるムーブ(move)に分類するムーブ分析を行っている。これらの2つの章はCDAによる分析へのステップとしての役割を果たしているといえる。

第7章(アーギュメント分析)では、ムーブ分析を踏まえたコード化により、筆者がレスンプランのアーギュメント(主張)の根拠として用いている、授業の恩恵(学習者の得る肯定的感情等)、問題解決のための活動、筆者の経験、学習者の声、教師としての信念等について分析している。第8章(語彙文法分析)では、語彙頻度、文の動作主、代名詞の指示対象、受動態、助動詞、命令形、動詞の共起関

係、N グラムによる語連鎖 (lexical bundle) 等に関する量的なコーパス分析の結果として、教師は学生を管理・コントロールする力を有する存在として、また、学生は活動のルールにより操作される受動的な存在として表象される傾向があるとしている。第 9 章 (活動分析) では、対象学習者の英語能力・習熟度、準備・活動の時間、教材・使用するテクノロジー、グループ分け・サイズ、キーワード等における授業目標、教授言語、活動の構造等の多様なデータを量的・質的に分析した結果、教師の信念と活動のタイプとの間の関係を示唆している。第 10 章 (特別なトピック分析) では、近年の日本の教育政策における国際化、学習者オートノミー、アクティブラーニング、新自由主義の促進を背景として、主としてテキスト分析の観点からコーパスを分析した。結果として、国際化は英語学習の重要性の根拠として、直接的には用いられていないこと、また、学習者オートノミー、アクティブラーニングに言及するレッスンプランはある程度あるが、学習者中心の活動はあまり取り入れられていないことを述べている。さらに、物の購入等の消費主義に関わる活動は見られるが、経済・金融に関わる活動は多くなく、新自由主義の影響は顕著ではないとしている。第 11 章 (インタビュー・質問紙分析) では、My Share の筆者へのアンケート、編集者へのインタビューの結果として、編集者の My Share の形式・内容への関わりは少ないことが判ったとしている。第 12 章 (考察) では、次の各 RQ に対応した考察を述べている。RQ1: My Share には構造・内容的に一定のルールが存在する。また、教師が中心であり、指導法の教師による選択を前提としている。RQ2: 教師の信念が重要視されるが、アイデンティティとしては、教師、学生ともに非人間化された存在として表象される傾向がある。RQ3: 教師に力が与えられており、学生に焦点を当ててはいるが学習者中心ではない傾向がある。RQ4: 最近の教育政策等とレッスンプランの内容との間に直接的関係は見られないとしている。この点も My Share の特徴であるといえる。

第 13 章 (終章) では、談話共同体としての My Share のルールの柔軟化と My Share の筆者の内容への意識の向上を実践的示唆として述べている。

本研究は My Share コーパスを使用した CDA による探索的研究であるが、専門職ジャンルとしてのレッスンプランの分析の一層の一般化には、コーパスのサイズ・代表性等について、今後、更に検討することが必要であると考えられる。本論文が、英語レッスンプランのコーパスを構築し、CGA を取り入れた CDA の理論的アプローチとコーパス分析、インタビュー・質問紙法を組み合わせたトライアングレーションに配慮した研究方法により、本研究の内的妥当性を高めていることは評価できる。また、学習者観・学習観等に関わる教師の信念等を、自己報告法 (self-report) ではなく、主としてレッスンプラン・コーパスの CDA による分析に基づいて、日本の英語教育の背景と現状も踏まえた上で考察した点は、独自性と研究上の意義があると考えられる。また、本論文の内容の一部を、国際雑誌、社文研紀要での 2 編の論文、国際学会において既に発表している。

以上により、本論文が博士 (文学) の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成 31 年 1 月 14 日に、外部審査委員 1 名を含む、学位論文審査委員会委員 5 名の出席のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表が英語でなされた後に、英語で口頭試問が行なわれた。本人により、学位論文における研究の背景・目的、方法、結果と考察及び関連領域の専門的学識に基づいた応答が適切になされた結果、申請された学位論文が博士 (文学) の学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査 山下 徹
委員 ラスカウスキー テリー
委員 大野 龍浩
委員 バウアー トビアス
委員 石川 慎一郎